

論文番号	13 (第11回研究会 2013.11.23 於 恵泉女学園大学)
タイトル	知覚情報の整理と訓練法——翻訳作業から考える
著者名(所属)	高橋さきの (翻訳者、お茶の水女子大学非常勤講師)
連絡先Eメール	sakinotk@nifty.com
論文内容	<p>(背景および研究目的)</p> <p>翻訳は言語間を超速で行き来する作業である。そのため、(イ)脳内では、原文側の言語処理回路と訳文側の言語処理とが混線したままになりがちであり、(ロ)通常の単一言語内での文章執筆時には生じ得ないような文が生じがちである。前者の混線状態を整理・修正するうえで、第一言語でのシャドウイング(聴きとりながら、同時進行的に音としてアウトプットする作業)が有用なこと、またその訓練方法については、すでに報告済みである(高橋2012、2013-1)。今回は、後者の対策について報告する。</p> <p>シャドウイングが有用なのは、(a)耳から情報入力ゆえに、それより先の部分に目を走らせることができない、(b)実際に口を動かすという動作を伴うがゆえに、聴き取りのみの場合と比べて脳内のより多くの回路が使われるという事情による。なお、シャドウイングと翻訳作業は、関与する回路の共通性が極めて高い(高橋2013-1)。</p> <p>翻訳時に、通常の単一言語内での文章の執筆においては生じ得ないような文が生じる理由としては、単一言語内での文章の執筆時には無意識に処理が行われていることがらであっても、翻訳時には意識的な整理が必要なことがらが多数あるにもかかわらず、そうしたことがらが翻訳原文から読みとられないままに翻訳作業が行われていることが挙げられる。具体的には、翻訳に際しては、(3)文章の内容やロジック以前に、(1)「『場面』と『場』」(高橋太郎1956)が指示語について整理したような、話し手と聴き手が「われわれ」的領域を共有するような距離感にあるのか否か(あるいは両方であったり峻別不能であったりするのか)について、また(2)原文の読み手が文章を読み進めるにしたがって、どのように自らの《目の位置》を移動させるのか、どのように語り手の声や物音を聞き取るのかについて、整理しておかねばならないのに、(1)(2)が意識的に行われていない場合が多い。なお、(1)(2)(3)は、それぞれ、(狭義の)言語コミュニケーション、非言語コミュニケーション、生物一般の存在察知行為に対応するものとして整理すること可能なことがらである(高橋2013-2)。</p> <p>本発表では、この(1)(2)に関して、シャドウイングによる訓練が有用であることについて報告する。(検討方法等)</p> <p>高橋(2012)同様、実際に各種のシャドウイングを行いながら、自己観察を行うという参与的内部観測を採用した。その上で、被験者をつのり、効果の検証を行った。素材としては、芥川龍之介の諸作品の朗読素材の冒頭部分を用いた。(1)については、特に、文末表現(「~のだ」「~のである」等)、動詞の種別(知覚動詞等)、助詞(「は」等)への注意を促し、(2)については、特に、歴史的・非過去(歴史的現在)、知覚動詞、オノマトペへの注意を促した。</p> <p>(結果および考察)</p> <p>シャドウイングは、文法知識の多寡にかかわらず実施しうる方法であるため、必ずしも文法用語を用いなくても上記のような事項について伝えることができた。特に、(1)は、音を通じて確認される部分が大きいことがらであり、この方法のメリットが大きかった。(2)に関しては、音の回路と視覚処理回路とを積極的に関連づける効果があることが推測された。</p> <p>(結論)</p> <p>第一言語でのシャドウイングという方法論は、文法的事項の伝達・共有、整理にも有用である。</p>
参考文献	<p>高橋太郎(1956)「『場面』と『場』」『國語國文』25-9</p> <p>高橋さきの(2012)「翻訳作業の参与的内部観測のために：日本語でのシャドウイングという方法論」対照言語行動学研究会発表論文概要 http://tinyurl.com/lv9pwdy</p> <p>高橋さきの(2013-1)「化学・バイオ系の技術翻訳者が伝えたいこと」時國滋夫、高橋さきのら『プロが教える技術翻訳のスキル』講談社 pp. 115-152</p> <p>高橋さきの(2013-2)「感覚を研ぎ澄まして「読む」」『通訳翻訳ジャーナル』24-4(2013年秋号) pp. 113-114</p>